

首うしろに刻まれた深い傷痕を左手に隠し
父は炭鉱の入口に私を誘う
辺境に林立する掘削機の墓標
劳咳の父の肺が
真っ赤な月を抱え
ころころと鳴る

恐竜の肋骨の長い坑道を行けば
黒い油の雨粒が降り注ぐ
「ここでヤマを掘っていた」
崩落した地底の行き止まりに
根腐れ土くれとなった四つ這いの父が埋まる

父はここで
斬首されたのだ

生命の循環の仕掛けに
組み込まれることを拒絶し
魂の断食をした父が
崩壊したここは現場だった

一点
岩を穿ち

樹液のように浸潤した父の意志が
壁を濡らし
甲虫の背の輝きで
坑内を淡く照らす

岩壁に小さな油玉が光り
無数に光り
一粒一粒が
やがて光る羽虫へと変態する

永い呪縛の時を経た羽虫は
一列に伸びた光の筋となり 坑道を旅立つ
日暮れた廃山の背に沿うて光る
長く連なる羽虫の群れは
遠く果たせぬ父の夢の残像か

父のかたちを辿り
手さぐりで

私は父を掘る
父と 父にまつわるあらゆる悔恨と懺悔を
反駁と抵抗を
憂愁と鬱屈を
執着と拘泥を
遺恨と呪詛を

私は 掘る

青黒い血管が全身を巡り
青い血が流れ
月に向かい疾駆した記憶持つかかと達と
父の時代を

私は 掘る
掘る…

父を掘る

江口久路

第6回「文芸思潮」 現代詩賞 当選



えぐち ひさみち
1956年 大阪市生まれ 京都市在住
54歳 劇場勤務
2008 第4回銀華文学賞 奨励賞
10 第5回文芸思潮現代詩賞 優秀賞

●受賞の言葉

軽妙に書けない。人生賛歌のまばゆさには怖
じ気を感じる。生者の中で孤独に病み、死者に
馴染もうとする。知らず、事物の陰に潜む不穏
な存在を幻視してしまう。

そんな私の詩が、昨年の優秀賞に続き今年最
高賞を賜ることになりました。心より御礼申し
上げます。ありがとうございます。

偶然どちらの作品も、父母という血の流れを
語る内容で連作のように取れるかも知れませ
んが、私の中で特に作爲したものでなく、他の作
品と同じ姿勢で臨んだつもりです。ただ、両作
が高く評価されたのは何か共通した理由があ
るはずで、いただいた選評を詳しく読み込み、
今後の詩作に活かすべく努力致します。

言葉の持つ重みを常に意識し大切にしながら、
これからも永く書き続けようと思っております。
ます。

このたびは本当にありがとうございます。

玩具を焼け払う、校庭の隅
建設中の小さな墓 続く前ならえ
少女たちの爪
類削る リズム
角質を 土に 忘れる
彼女たちは いま以上の無垢を欲する

歳

心臓を貫く筆と そこから漏れてゆく少女
鉛はあどけない赤に舗装され
黒色を増す いよいよ
いよいよ

土から芯が伸び
どんだん 刺さる ほそい 足
どんだん

固まる
固まる

一瞬、
誰かが おもいだした
いきもの

(沈黙)

(再び)

生前の感覚
産み落とす 昨日の庭
妹のこめかみにコンパスを突き立て
しぶく歳を浴びる 姉
耐えきれず

ぼろぼろ
ぼろぼろと土に帰る 姉

(帰宅)

改めて
同じ視力で
庭を 観る
足首が咲き乱れた
たくさんの輪ゴム、
幼いわたし

校庭の中で終焉を迎える

愛すべき、

情景

校庭世界

アン 阿部



アン あべ
1988年 栃木県生まれ
早稲田大学基幹理工学部表現工学科在籍
文芸社ビジュアルアート出版文化賞2009
特別賞
日本文学館出版大賞ポエム部門特別賞
2009年 詩集「現代ポエム病棟」刊行
現在、視覚詩、言葉に着目したメディアア
ートに興味がある。
<http://anabe.jp/>

●受賞の言葉

この度は現代詩賞に選出していただき、ありがとうございます。
言葉、文字の造形、これらは自分を強く魅了して
止みません。
現在、様々な実験詩に挑戦していますが、受賞を
更なる糧として、今後も現代詩の可能性、言葉の表
現を模索し続けようと思います。
再度、熱く込み上げる感謝の気持ちで一杯です。
このような素晴らしい機会を、本当にありがとうございます。
ありがとうございました。

錫色の布を羽織った空
背籠を埋めるくず蟹の行商へ
女の群れが
紫紺に染めた荒波が打つ
夜明け間近の駅に立つ

オレンジ色の裸電球が揺れる
ト口箱からはみだす蟹の山
算盤がなり立てる男たちの声に
女が大釜で蟹を茹で
はじき出される半端もの

朱の糸を引く夕暮れ
海沿いの置石屋根に棲む
一人暮らしの母を迎えに
各駅停車に乗る潮の臭い
ひとの血を切れるものか

蟹は売れたかい
嫁さんとの仲はどうかね
隣の老女が車窓に聞く
荒れる海が咲かせる白い花々
ひとは隠れ駅に消える

惚けた母が崖のそば道を歩く
海で命を捨てた亡霊が語る

にぎやかな港に湧く蟹船
父や兄が乗った遠い日
女が悲しみを抱いた記憶

セイコ蟹の真っ赤な内子
濃緑の味噌を嚼る音
五本の脚を一つに束ね
口いっばいにかぶりついた
母を待つ少年の私がい

いっしょに棲まないか
父や兄の墓を守る誓いに
鱧皮した母の手にこびつく
日々の岩海苔採りの匂い
念仏が潮風を呼び寄せる

母を迎えた晩
妻の蟹鍋に生きる箸が突く
丁寧な身をほぐす父親の私が
子どもの皿に
蟹の空殻が幸せを積んでいく

海からはるか遠い地
母の中に棲む蟹が
深い海底に向かって泳ぎ出す
忘れ蟹を獲りに父や兄は船に乗っただろうか

忘れ蟹

後藤 順



ごとう じゅん
1953年生まれ
詩歴詩集「日本海かぶれ」ほか二冊最新詩集
「ぬけ殻あつめ」本年九月
土曜美術社出版販売
発刊

●受賞の言葉

勤め帰り、鮮魚店の前で立ち止まった。目の前には、松葉蟹が積まれてあった。冬が、と思った。子供骨格に包まれ身が、何か異様に感じられた。越前海岸から眺める海がいい。四季にかまわず、一人で出かける。海が物語ってくれるからだ。海辺に生まれた訳でもないのに、海の匂いが血の中を流れ始める。「生きていくんだね」と、教えてもくれる。今回受賞できたのは、そんな血が僕に詩を書かせてくれたのだろうか。蟹の眼で人を観察する僕がいる。家族を見つめる僕がいる。生きるために、自死しないために、これからは詩を書き続けるだろう。受賞の喜びを日本海に伝える時間を作らなければならない。

ひかるはるはち

平岡靖生

春の縄れが
脳神経を持ち上げ
私を許そうとしないのは
流れ落ちてしまった水の廻轉
空が撒き散らす精子に
追い回されるからだろう
破壊をともなつた誕生

新緑のある生活
はいい
乳首のある暮らし
はいい

はぐくむのちのそらおそろしくちちあるのそら
憶えててくれたかなあ？

丸裸 切り開かれて 夜

引抜かれた短刀で白銀に赤く卵が崩割れ目から光りに結ばれぬ種子
どこまでいつまでミルク色の空彷徨う血に重たい生まれたて陽射し
んなか幼なじみとドロダング味舌先だけでさがしまわるまあるくと

溶ケ流レ出タ黄實の土臭い宇宙にふたたび零ばれ墮つてく我が現身

銀髪 一筋見つけて 狼

もうじき思い出せそうね

たにんのはだかよりはだかのじぶんみつめなあかんのとちがいますか

羊水の穴の奥散らばる胎児
人類遡れば新しい哺乳類
最低条件として
アナタのウソは判るのよ
なぜかな……？
そうかわ

眠ることもできないのは
時計の針ばかりじゃないのかも

あほんとだいわれてきがつくいくつになつてもおとことおんな

それは 映畫でも 戦場寫真でもない
どうやら最後のページになった
人間には終わりがあるらしい
尤も あたらしい哺乳類の
知ったこぢゃないがね

きみたるやうであればあるだけちでちれさくさくら



ひらおか やすお
医師と印刷職人の祖父の血は隔世遺伝する天稟を齎し、1964年、誕生する。幼年期は押入で宇宙交流と瞑想に耽る。が、「三賢人の礼拝」劇で、キリストに生誕。九州産業大学、芸術学部美術学科卒業。在学中に脳内出血発症。福岡市民芸術祭「市民文芸」詩部門にて、平成19年「文化芸術振興財団賞」、平成22年「福岡市議会議長賞」を受賞。私家版作品集（文章、写真）数種類制作。ウェブ・サイト『ははのちち』主監。趣味……写経。文通。糞し事。「芸術にジャンルは無い」を標榜し、詩（ことば）に限らない表現行為で、磁力、触覚として絵になる文字を刻み、問い直し生き直され、詠み換え甦らせる『ダウジング翻訳』を発明。目にうつる世界に改めて驚嘆する側頭葉癲癇者。

●受賞の言葉

ありがとうございました。受賞の光栄に寄せ。

鍵のない子はどこまで続く帰り道
扉よ開けば宇宙生身で泣け笑え
やがてすべてにみちあふれるよう

おのずから音となり、色、カタチである「活きの
好い謎」の提示を芸術表現と呼び「望まれた未来」
を予見するものが詩と呼ばれるでせう。

それは、我が身を粉削ることではか生き得なかつたモノたちへの賜物として、ある種のシャーマニズム（憑依）状態が生み出すもので、消費社会の商品価値とは凡そほど遠い彼方から到来すると、ワタシは感じています。

「死者と伴走（伴奏）」する口寄せ巫子の預言、イタコ羅針盤の倫理は、「存在は進歩しない。けれど神は存在ではなく状態なのだから」と精確方向指示しながら、「しは空気感染する。イキモノだけが人間じゃあない」と教えるでせう。言うまでもなく、「し」＝「死」は、「詩」で結び逢わされた「生」に他なりません。

ただ、生者よりも死者の方が絶対多数でしか在り得ないこの宇宙浮世界では、粘つき濡れた剃刀のうえを、血を滴らせ書き動かされているようでもあります。

受賞三部作は、何れも融通無礙。何処からでも出入り可能なクラインボトル式構造。始まりもなければ終わりもないメヴィウスリング状構成にて「生と死のアナロジー劇場」。いよいよ開幕です。皆さま、生きるに値する堂々巡りをば、篤とお楽しみ戴ければ幸甚です。

コトバ剥離

榊一威

、なぜか、普通と違うところへ帰着する、
思考に、進行中のランプがともると、息ができない、
入力済みの感情が、悪戯している、困惑を超えた、領域、
含む裡から、崩壊する、解釈されない理由を、考える、

、何故、動いて、いるのですか、

唯一の光よりも確かな、現存在、が、そのまま、止まることもなく、
わたしを、襲う、

世界の不変の理由を、わたしは否定し、巧妙に隠された、
創世の定式を、そつと、纏う、

、いったん離れてみようか、

描く方法は、幾らでもあるけれど、本当は、それ以前の、
可能であるかどうかの、問題、であり、
軸がぶれずに回転することに、説明はいらない、

、意味を超えて、ココロだけが、走り出す、

予想もつかないくらいに、外觀をもつてしても、
届かないなら、変わらないね、
大量の目が、あの煌煌とした、月を見ていることにも、
気づかないで、いる、よ、

、データだらけの、わたしたちです、

世界との距離は、それほど遠くなく、還元される、
すり抜けてゆく、疑問形に、ココロは届かなかった、
与えられたパラメータに、明らかな矛盾が加わってゆく、

、解決のない、世界、わたしは、模型、

コトバ剥離、気づかれないように、思考に入り、ランプがともる、
世界に意味は通じない、なら、領域をこえてでも、構わない、
新たに、わたしを、入力しよう、

、息が、できなくなる——



さかき かずい
東北芸術工科大学卒
詩ブログ「アリエナシオン」
絶賛公開中。
<http://ameblo.jp/mukuro4219/>

●受賞の言葉

文章を書くことは、ぼくのライフワークである。
この選出された文章も、けて突出したモノでは
なく、ぼくの中での一作品にすぎない。いや、素
直にうれしいのだけれど。ただ、世界をぼくと云
うフィルタを通して再構築させたのがすなわち作
品であるのに、その風景は意外な程難解だと云わ
れる。しかしそんなことはなく、読み手と書き手
のリズム、呼吸があったとき、それは爆発し進化
するのだとおもう。現在でさえ、文章は刻々と変
わり続け、最終形態になる為の途中だ。ぼくは、
18の時、自身の中に潜む深淵をみせつけられ、コ
トバがぼくの裡から消えたことがある。闇だ。そ
れから感覚を少しずつ手繰るように細い糸でつな
ぎ止めるように、文章を書くという行為でぼくの
輪郭を確かめてきた。おもえば、それが出発点だ
った。ぼくは10代の宿題を、未だ解き続けている
人間だ。それに結果がついてきたものと勝手に解
釈する。この度は、賞を頂き本当にありがとうございます。